Catocala の生活史探索をめぐる最近の知見[1,2]

杉　繁郎
東京都大田区大森北4丁目 14-12

Up-to-date informations about the life-history of Japanese *Catocala*, with a guide to the field survey

Shigero Sugi

本日は，*Catocala* についてお話するわけですが，今年の総会の講演テーマに *Catocala* がえらばれたということは，私なりに考えてみますと，この美しいヤガの一群が近年いろいろと研究がすすみ，その結果分布や生態についても興味深い問題が明かになりつつあること，蛾には興味のない人々のなかにも，この *Catocala* だけは何となく好感をもっている人が案外多いこと，*Catocala* の生活史究明が一部ではかなり組織的に行われ始め，往年の蝶生活史探求の全盛期の段階にさしかかっていることなど，今ややもすれば画然と分れている蝶屋と蛾屋の交流できる一つの接点ともなり得るテーマであることなどのために，本会にふさわしいテーマであると企画者の方で考えられたのかと思います．

そこで，なるべくそういう観点から今日のお話しをしてみたいと思います．私自身，ここ2，3年 *Catocala* の調査のためにずいぶんフィールドに出ておりますし，また蝶の方の進んだ知識が，私の研究のこの上ないガイドになっております．また蝶にくわしい方々からも沢山の有益なノーハウを得ているのであります．

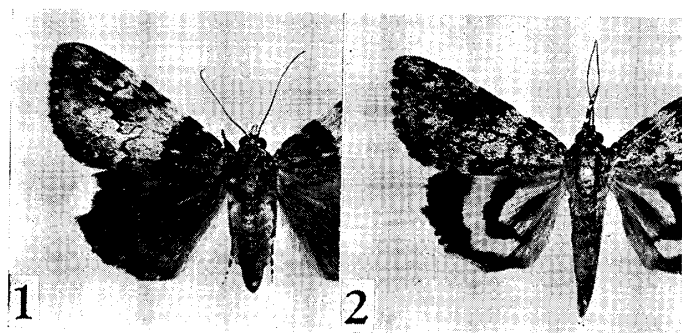
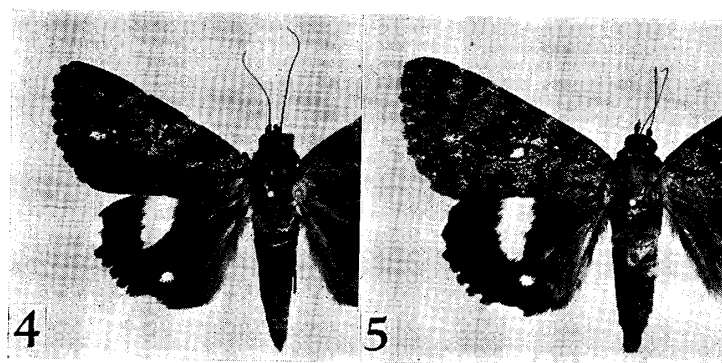
ミドリシジミ類の知識が役立つ：

ご承知のように，*Catocala* は北半球の温帯に約 200 種を産します．そのうちアメリカに約 100 種がおりますから，ユーラシア大陸には残りの 100 種が分布し，おおよそモロッコ，地中海，中近東，インド北部，中国南部，台湾山地を経て日本を結ぶ地域を属の南限としていることになります．この属はよくまとまったグループで，幼虫は広葉樹を食草とし，すべて年1回の発生，卵で越冬します．幼虫は4～6月ごろに若葉を食べて育ち，蛾は6～7月には羽化する．おそいものは9～10月まで生存します．日本でもかなり豊富で，現在 28 種が知られ，各種の分布パターンはさまざまですが，本州中部には全種を産します．また日本特産種も多く，世界的にみても面白いフォーナを示しているようです．

この類の分布や生態を研究対象としてみるとき，“ゼフ”という愛称で知られるミドリシジミ類といろいろの共通点が多いのであります．それは食樹範囲，食性の分化，幼虫の出現期，林相との関係，越冬卵の採集テクニック，越冬卵と孵化幼虫の管理など，ゼフの方ですでに判っている知見が実に役立つのであります．*Catocala* では，世界的にも，ゼフのような精細な分類体系はまだでき上っておりませんが，分類における生活史の役割の重要性はかわりありません．将来その結びつきはいっそう明かにされるものと信じられます．

分類と食性は対応する：

後翅の色は，例えばベニシタバ，キシタバというように，素朴な分類概念となりますが，これは大局的には自然分類とよくマッチしています．ただし注意しなくてはならないのは日本の和名語尾のことで，これは必ずしも適切

1) 本稿は，1967年10月8日東京国立科学博物館で開催された日本鱗翅学会総会における特別講演の速記録に補筆したものである．
2) 本文主題に関心のある方は，私の次の報文と併せ読まれることを希望する．
杉，1966：日本の *Catocala*—分布と生活史解明の最近の動き，インセクトジャーナル，2：20-27.

Figs. 1-2. 外見上著るしく異なるが，ごく近縁な関係にある二種：1. *Catocala dissimilis* Brem. エゾシロシタバ，2. *C. duplicata* Butl. マメキシタバ．（実物大）

Fisg. 4-5. 東アジア特産の特異な群である 4. *Catocala nagioides* Wilem.(=*sancta* Butl.)ヒメシロシタバと 5. *C. actaea* Feld. コシロシタバ，両種はもちろん近縁である．（実物大）

でなく，特に——シロシタバという和名が問題です．どういうわけか，日本を含むアジア大陸の東縁だけに，キシタバでもベニシタバでもない特異な *Catocala* が数種あります．和名でいうとオオシロ，シロ，エゾシロ，コシロがそれですが，これらは全く別な要素のよせあつめであって，外見上でもすぐ判るように，ヒメシロとコシロがごく近縁であるほか，互に何ら直接の関係はありません．私の未発表の研究では，意外にもエゾシロはマメキシタバときわめて強い類縁関係をもっていることが判明しています．これはゲニタリアでも幼虫でも証明され，私はうかつにも野外でその幼虫をとりちがえたほどでありました．

ベニシタバは，世界的にはヤナギ科に固有な大群で，エゾベニもここに入りますし，新大陸にもよく発達しております．一方 *Quercus* を食うオニベニの方は，これまた国外には仲間の多い別のグループに属し，ヤナギ科のベニシタバ群とは一応無縁と考えられ，幼虫もずいぶんちがいます．いっそ和名の方も，ヤナギ科につくのをバライロシタバ又はモモイロシタバ，ブナ科につく方をヒイロシタバ又はシュイロシタバとでもしておけばなおよかったでしょう．ついでに食樹についていうなら，以上のほかに，日本とアメリカに２種しかいないオオシロシタバ類はシナノキ科，残りのキシタバ類が主としてブナ科又はバラ科というようにだいたいグループごとに分類と対応しています．このほかアメリカ大陸にはクルミ科につく，クロシタバとでもいうべき *Catocala* の大群があり，その一部は近縁のヤマモモ科の植物にもつきますが，これは旧大陸とはまったく無関係です．

キシタバ類の食樹範囲：

世界でも日本でも，種類の多いのはキシタバ類であります．日本で生活史未知の種も大半はキシタバであり，私どもが今後の調査目標としているのも当然この群です．

キシタバ類の食樹は，ざっとブナ科系とバラ科系とに二大別できるようにみえます．日本では，２種がマメ科に進出していますが，これらは潜在的にはブナ科食いのようで，どちらもその記録があり，マメ科は二次的な転移と推定されています．

ブナ科という食性は，ミドリシジミ類のそれを想出させます．ゼフのなかにもハンノキとかマンサクにつく例外が知られるように，*Catocala* でもこの点は同じです．アメリカにはツツジ科に進出したキシタバがあり，これはちょっと飛躍しますが，ヒマラヤでシャクナゲを食うゼフとよい対象でしよう．日本ではツツジ科はまだ出ていませんが，意外にもニレ科のハルニレを食うケンモンキシタバが先年知られています．これをバラ科からの転移と仮に考えてみると，ゼフと同じく卵越冬性のカラスシジミが想出されます．

ブナ科の方を見てみましょう．２，３年前には，その知識はきわめて貧弱でしたが，*Catocala* 各種の分布から

考え，特にゼフとの類推から，*Catocala* でもいろいろなブナ科の植物に固有な関係があるのではないかと考えるようになりました．常識的にいって，まず *Fagus* ブナ属に固有なもの——ゼフではフジミドリが唯一の代表者です——，次に *Quercus* ナラの類では，山地のミズナラ帯に出るもの，平地のクヌギに限ってつくもの，ゼフのハヤシミドリやウラジロミドリのように局所的な分布をするカシワにつくもの，もう一つは，キリシマミドリ型の暖地の常緑カシ類 *Cyclobalanopsis* につくものなどが想定されるわけです．それで，一つは種別の詳しい分布図を作ってそれを解析すること，一つは親メスから採卵して，孵化幼虫の餌付けをしてみること，一つはフィールドへ出て幼虫さがしをすること，これらがもっともオルソドックスな手段であり，またそれ以外に方法はないわけであります．もちろん私ばかりでなく，直接間接に多くの方々の力をお借りしましたし，とりわけゼフにくわしい蝶屋の人々とのディスカッションはきわめて有益でありました．

アラカシから出たウスイロキシタバ：

そこでまず，昨年[3]ですが，常緑カシ林にねらいをつけました．場所としては有名な滋賀県の八日市をえらびました．ここは川沿いに，ベルト状にひろがるアラカシを主とした自然林に，14種の *Catocala* を産する宝庫でもあり，関東では珍品といわれるウスイロ，カバフ，フシキを3種とも産します．東京からだと米原まで新幹線で出かけるわけですが，ここなら何らかの収穫がありそうだと期待したわけです．結果は，たいへん苦戦でしたが，わずかに1頭，5月8日にアラカシの枝から未知の終令幼虫をみつけました．これがウスイロキシタバだったわけですが，静岡市から西の平地でとれる本種の分布とアラカシというイメージはピタリ一致します．こうして常緑カシの調査は一応成功したわけです．今年は3人の仲間で出かけ，やはりアラカシから幼虫をとっています．

ゴマシオ幼虫をブナで発見：

次はブナ作戦です．これは判ってしまえば実に明白なことなのですが，それまではたいへんでした．まず分布像からの割出し——ブナであれば一応日本特産種でなければならないし，北海道では道南以外にいてはならない．四国，九州ではかなり高い山地に限られるだろう——こうして東北や上越山地におびただしく産するゴマシオキシタバが，だんだん浮び上って来ました．最後まで疑問だったのは，たった1つだが根室でとれていること，定山渓でもわずかにとれている，それに私の知っているところでは，軽井沢付近にはゴマシオがとれるがブナのないことでした．

ところが，ゴマシオは朝鮮半島にはいないのに，それが日本海上の鬱陵島でとれたこと——これは韓国の文献に数年前に発表されたのですが，ここにはブナがある．白水博士もフジミドリの分布論のなかで書いておられる．これでほぼ確信ができました．去年の秋です．運よく，メスから採卵した卵が手に入った．孵化幼虫の餌づけは時にむつかしいのですが今年の4月に何匹かがイヌブナの若芽に食いつく．あとはすらすらと，5月に若葉ののびた上越土合口での幼虫探し，3令幼虫2頭の発見と手ぎわよくゆきました．コロンブスの卵です．その後イヌブナからも終令幼虫が見つかっています．

Fig. 3.　最近北海道にも分布することが確認された *Catocala connexa* Butl. (=*rutha* Wilem.) ヨシノキシタバ．示した標本は大沼産, 16. viii. 1967, 大村信一氏採集品．(実物大)

ゴマシオの究明過程で，次の目標が出て来ています．ヨシノキシタバの分布です．日本特産，東北に多産地がある．谷川岳周辺に多い．西では奈良大峰山，氷ノ山，伯耆大山，九州彦山，四国山地．ヨシノのいるところでは必ずゴマシオがとれている．まことに都合よく，今年になってから道南—函館と大沼の記録が出ました．大沼でも，無数のゴマシオに混って数匹

3)　1966年，文中本年とあるのは 1967年を指す．

のヨシノが採れたといわれています.

私はひそかにヨシノ＝ブナ説を信じているわけです. 来年の第一目標になりましょう.

ヒメシロの食樹を推理する：

クヌギとコシロシタバの結びつきははっきりしています. 平地に多いこの *Catocala* の分布北限は岩手県, クヌギの分布もだいたいその辺まででしょう. 関東平野, 武蔵野のクヌギ林に多いこの蛾は, 山地のミズナラ帯に入るとまずとれません. そうすると, コシロの近縁種で, 山地でポツポツとれるヒメシロの食樹は何でしょうか. 図上調査ではカシワの可能性が浮んで来ます. 局地的なヒメシロの産地が, どうもカシワのそれと——実際にはハヤシミドリのそれと一致しているようにみえる. このように, カシワのミクロな国内分布を書いた本はないと思いますが, 蝶の採集案内や地方の目録をみてハヤシの分布を知るとそのうらにカシワの分布が浮び上って来る. 実にありがたいことだと思います. ハヤシミドリとゆかりの深い, 異名となりましたが ***hayashii*** の模式産地でもあった榛名山は, ヒメシロの産地です. また高尾山では, 頂上付近にカシワ林が発達していますが, 同地のヒメシロはこのカシワ林でとれたもので, ケーブル駅の灯火では誰もとっていないといわれています.

ミズナラ帯に多産するエゾシロ：

ミズナラ帯に多産するエゾシロシタバはミズナラのない低山にはまず降りていないようです. 榛名山で, 私がカシワを探したときは, ミズナラでもカシワでもたくさん幼虫がとれました. ただし近畿地方へゆきますと, 例えば池田市の奥の, ヒロオビミドリで名高い三草山ではミズナラのない低山に, エゾシロがかなりいるという話を聞いています. *Quercus* の林相, たとえばナラガシワなどが何らかの役割をしているのかどうか, 調べる価値がありましょう. ある種のゼフが, 西日本へ行くと垂直分布を下げていることは蝶をやる人にはよく知られています. *Catocala* にも同じことがあるわけです. 同様なことは, オニベニ, アサマ, マメなどでもいえそうで, 関東中部では山地性というか, ミズナラにつくアサマが, 八日市では常緑カシ林に多産し, 幼虫はアラカシをはじめ, アベマキやクヌギでも見つかっています. 関東の平地のクヌギ林ではまだアサマやオニベニはとれていません.

ここで空想を一ついうなら, 足摺岬—室戸岬—伊豆石廊崎という分布をするクロシオキシタバをウバメガシと結びつけてみたらどうだろうかということです. クロシオはこのほか, 神戸市でとれた一例が追加されていますが, これも必ずしもそれを否定する材料にはならないでしょう. こういう分布をするゼフがないのはちょっと淋しいのですが.

マンサクをめぐるナゾの幼虫：

私ども *Catocala* の幼虫探しをしている仲間のあいだで, 一つ話題になっていることがあります. それはマンサクをねらおうという一つの足掛りがあることです. 実は私の手もとに今1枚のカラースライドがあり, それには未知の *Catocala* の幼虫がうつっています. 採集場所は岐阜県, 谷汲山に近い根尾村水鳥谷, 写真には植物の葉もうつっていて, 葉の方は少しピントが甘いのですが, それがどうもマンサクらしい. このスライドの撮影者は, 私は知らないのですが, 人づてに聞いてもらっても植物の記録は残っていないらしい. 写真の判定が唯一の手がかりです. もっともこの葉は見ようではヤマハンノキのようにも見える. *Quercus* では絶対にありません, 面白いのはそのどっちであってもゼフの食樹だということで, マンサクはもちろんウラクロ, ハンノキはいうまでもなくミドリシジミの食樹です. これをどの *Catocala* と結びつけるか？ 強いていえばジョナスくらいしかないのですが, これがヨシノという声もあります. マンサク探しは今年もやったのですが失敗でした.

産卵場所がつきとめられたシロシタバ：

バラ科の方へ話をうつします. シロシタバの食草は昔から知られていました. ところが卵から幼虫をかえすと, サクラにはどうしても食いつきません. これは後で判ったことなのですが, シロシタバはウワミズザクラでないとだめなのです. もっとも田中蕃さんや森石雄さんの調査なのですが, どうもイヌザクラとか, リンボクのような,

Prunus のなかでも穂状の花序をもつサクラは食べるらしい．花を観賞するヤマザクラやソメイヨシノなどには幼虫はつかないことが判った．これは大きい収穫で，今まで漠然とサクラを探していたのはまるで見当ちがいでした．

ところで，このシロシタバは日本で野外の産卵場所のつきとめられているただ一つの *Catocala* であります．一般に *Catocala* の産卵位置は樹幹だといわれています．この点は，普通のゼフとはちょっとちがう．だいたいあの大きさで，休眠芽の根もとへ一つづつ産卵していくような芸の細かい仕事は *Catocala* には無理かもしれません．*Quercus* の樹幹では，コルク状のヒダなどへ産込むと思われるのですが，ウワミズザクラの幹は割りになめらかです．これも八日市での森石雄さんの発見なのですが，八日市の愛知川堤防沿いの林は，湿地のせいか，地上から 50 cm くらいの間は，幹に湿潤なコケ—地衣ではなく，蘚類です—が一面にとりまいている．卵はその中にあるのです．手ごろな大きさのウワミズザクラが五本あれば，五本とも卵がついている．私も今年森さんの御案内で教えてもらったのですが，ちょっとコケをむしりますと，その中に幾粒かの卵がついているという風です．

Figs. 6-7. ウワミズザクラ樹幹に静止する *Catocala nivea* Butl. シロシタバの終令幼虫．6. 背面，7. 側面．滋賀県八日市にて，1967年5月14日，田中蕃氏撮影，地上約 50 cm.

これで少くともシロシタバの産卵場所はつきとめられた．そこでむしろ私は卵の濫獲を心配したわけですが，それほど自然のしくみは簡単ではなかった．というわけは，それからも各地の山を歩いて，ウワミズザクラがあると注意するのですが，根際に全くコケがついていないのであります．これではどうにもならない．濫獲どころか，私自身それ以来一粒の卵も自分では見付けていないのであります．

重要な役割をもつ高原のズミ：

シロシタバの話はこれくらいにして，バラ科につくキシタバ類の話ですが，これはゼフとはちょっとおもむきがちがっていて，中部山地の，浅間山とか八ガ岳山麓，日光戦場原などの高原に多いズミという植物—これはリンゴと同属の植物です—が重要な役割をになっているようです．この木には，少くとも4種の幼虫がつく．その1つは，おそらくズミに固有な種で，個体数もそれらの地域ではべらぼうに多い．一日に 20〜30 匹もとれます．ノコメキシタバです．成虫も最優占種となっています．この幼虫には，*Prunus* を与えても受けつけません．セイヨウリンゴは与えればよく食べるので，*Malus* ならよいのでしょう．分布もはっきりしていて，中部高原にはあんなに多いのに，新潟県ではとれていない．東北地方さえ記録が出ない，西の方ももちろんおりません．北海道では東部の方にはおりますが道南にはいないらしい．これはおそらく食樹に起因していると思います．

もう一つのズミ食いは，ハイモンキシタバです．この分布もノコメとよく似ています．この幼虫は今年まで私もとったことがなかったのですが，それはノコメよりも出現期が早いためであることが判った．ノコメよりも少くとも 10 日ほど早く，幼虫は6月に入るとまもなく姿を消してしまうようです．この幼虫がノコメとちがうのは，*Prunus* を食う場合もあることで，今年木曽の高原ではズミと同時にスモモを摂食している幼虫がとれております．本種がノコメの真空地帯である東北地方でもポツポツとれるのはそのせいもあるかもしれません．

ミヤマか？ワモンに似た幼虫：

3番目はワモンキシタバ．これはハイモンなどと反対に，ズミにもつくことが初めて判った．元来ヨーロッパでも日本でも，*Prunus* につく普通種とされ，特別な話題とはならないでしょう．ところが第4の種，ワモンとよく

似た幼虫がもう一種あるのです．今年初めて1頭とった幼虫は，蛹化に失敗し，種名が確認されていないのです．この幼虫は与えればサクラをよく食べたので，ズミに固有かどうかは疑問ですが，私の推定では，分布等を考慮しミヤマキシタバである公算が強いと思います．この虫も来年の課題となりましょう．

さて，今日これまでに名前の出なかったカバフ，フシキ，アズミ，ナマリの4種は，いずれも珍品ぞろい．分布も山陽山陰に特に多いカバフを除けばほとんどが局地的で，食樹は差当りノーヒントですが，私の予想ではこのなかにはブナ科食いの種は一つもないのではないかということ，それらは基本的にはバラ科系統の種で，そのうちの若干は意外な科の植物に進出しているのではないかということです．*Quercus* 以外では，密度の高い適当な林がなかったりして，なかなか探しにくいので弱りますが，数年のうちにはこれらにも手がかかって来ると思います．

マツのある林が採集に好適：

最後に，これからこの問題に取組もうという人のために，二，三付加えますと，第一に親メスからの採卵，これも特別のテクニックは開発されていません．蝶のテクニックの応用が期待されています．経験的には，ムラサキ，ベニ，エゾベニ，シロ，オオシロなどの種はやりやすく，キシタバ類がむつかしいといわれています．これには時期の選択，とくに多くの種では成虫の寿命が長いので，8月後半から9月にかけての時期をえらぶべきかと思います．

野外での幼虫採集，これも必要な植物の知識は大事ですが，特にかわった方法もありません．ただ一つだけ注意するとすれば，まず木の大さ，つまり卵越冬の *Catocala* では親メスが好んで産卵する木でなければならないわけで，どうも幼木は好ましくないようです．それから特に *Quercus* の場合，林の構造，木の密度がほどほどで，風とおしがよく，下草が茂りすぎない，ところどころに空地のあるような林がよいようで，これは *Catocala* 成虫の昼間採集の経験のある方はご存じと思います．*Catocala* の採集記などには，よくマツの幹にとまると書いてありますが，このようなマツを含む林—マツ林にはたいてい下草がありません—，ある人がうまいことをいいましたが，遠足に行ってベントウを食べるような林が一ばんよいようです．若い幼虫は葉裏におりますが，面白いのは多くの種で，終令幼虫が昼間は必ず樹幹におりて来て，上向きに静止していることです．この習性はエゾベニ，シロ，エゾシロ，マメ，コシロなどで観察されており，6月中旬ごろミズナラの林で幹を見てまわると面白いようにエゾシロの終令幼虫がとれることがあります．

ヒサマツミドリは何から出るか：

たいへん長くなりましたが，*Catocala* はあと9種が幼虫未知のまま残されています．ゼフの方はヒサマツミドリだけですが，これがなかなか見付かって来ない．ヒサマツの食樹が何であるかは，私もたいへん関心をもっているのですが，ヒサマツの食樹がもしも意外な植物であったとしたら，その木には案外 *Catocala* もつくかもしれない．*Catocala* の最後に残った1種とヒサマツとが同じ食樹であったというような愉快なこともあり得るかもしれないのであります．

このへんで終りたいと思います．

あ　と　が　き

本稿の作成にあたっては，特に明記してないが，日頃いろいろと御援助を賜っている方々の最新の知見を併せ利用させて頂いた．とりわけ中臣謙太郎（東京都），田中蕃（名古屋市），森石雄（八日市市），吉田良和（千葉市）の諸氏からは多くの未発表事実の提供を受け，またこれらの諸氏との討論の中から有益な示唆を得たことが多い．ここに改めてお礼申上げる次第である．

速記録を印刷に付するに当って，二三の補足をしておきたい．盛岡市の斉藤修氏は，私よりも1年早く，ゴマシオキシタバの採卵に成功され，その食樹をブナと想定されて，1966年にその飼育に成功された由である．私がインセクトジャーナルの原稿を執筆した当時は，ゴマシオの食樹に深い関心をもちながら，定山渓に産することや軽井沢でとれることの説明ができず，またその前年にイヌブナを含む数種の植物に孵化幼虫が全く食いつかなかった経

験がわざわいして，どうしてもゴマシオとブナを結びつけることができなかった．これは当るかどうかまだ未知数だが，ヨシノとブナの関係など，考えてもみなかったことである．人間の頭の廻転はおよそこのようなものであろう．青森市の千葉秀樹氏の話では，盛岡市郊外には，ヒメシロシタバのかなり多産する場所があり，そこは正にカシワの木が現れはじめるところだという．ヒメシロ＝カシワ説も有望になって来た．青森市の古木誠氏はすでにヒメシロの親から採卵に成功している由で，来年に期待がもてる．

本稿では幼生期の形態には全く触れなかったが，一部の熱心な同好者の間では，*Catocala* の卵の形態もよく調べられ，すでに卵で種の同定がなされる段階に来ている．岐阜市の岡田正哉氏も現在 *Catocala* の卵を十数種調査されている．アメリカではすでに *Catocala* の分類に卵の形態も採入れているので，その成果が充分に期待できることは疑いない．今後数年の *Catocala* 研究の進歩は大いにたのしみである．同好者のいっそうの努力を期待したい．

ハヤシミドリシジミの雌雄型2例

西山日出夫

群馬県前橋市東大室町甲 6番地

Two examples of gynandromorph of *Favonius ultramarinus* Fixsen

Hideo Nishiyama

台湾産アゲハチョウ科，シロチョウ科の雌雄型は文献，実物などでときどき目にするが，本邦産ミドリシジミ類についてはその報告はすくないと思う．筆者は従来報告のないと思われるハヤシミドリシジミ（*Favonius ultramarinus*）の雌雄型の2標本を所蔵するので報告する．

ハヤシミドリシジミの雌雄型

雌雄型 No. 1 (Fig. 1)

1962年7月23日，群馬県榛名山頂上火口原において小池正之が採集した．当時は採集に訪ずれる人もそう多くなく，カシワ林内にはハヤシミドリ，ジョウザンミドリ，ウラジロミドリ，ダイセンシジミ，ムモンアカシジミ，などが多産していたが，これは約30頭採集したハヤシミドリシジミの中の1頭である．

採集時には触角は完全であったが保管が悪く欠損したもので，雌雄の翅は写真と同様な破損状態にあったということである．青色鱗粉の発達は普通型よりやや弱いが，いづれにしても完全な左右雌雄型である．

雌雄型 No. 2 (Fig. 2)

1967年は数年ぶりにゼフィルスの多発が観察された．火口原にアサマシジミがヒメシジミと混飛していることを聞き確認にでかけて得た個体である（アサマシジミは確認できず）．飛翔中より弱々しく，もしやと思って採集したが，前後翅とも伸張しきらず先端が彎曲している．鱗粉は全体的に褐色部が多いが，左前翅に青色部が多く，右前翅には基部を除き青色鱗は存在しない．左右後翅では翅脈にそって数条の青色鱗粉がみとめられるにすぎない．そして青色鱗はいずれも，はけで泥絵具を塗った感じであり定着の悪い状態を示す．裏面は完全に雌の特徴をそなえている．また大きさは前例と同じく普通型に劣ることはない．標本はいずれも筆者が保管している．